

横浜国際高等学校における外国語教育活動 —ドイツ語教育を中心として—

出羽 由紀

1. はじめに

本校は、「国際社会でリーダーとして活躍できる人材の育成」を目標に 2008 年度に開校した、単位制による全日制の課程、国際情報科の専門高校である(2017 年度入学生より国際科へ学科改編)。外国語で自由に意見交換できるコミュニケーション能力と ICT 活用能力を身につけ、国際社会で活躍する人材の育成を目指し、日々の教育活動を行っている。

本校の教育活動の大きな特色は高度な英語教育、および第 2 外国語教育である。他の高等学校においては、他教科も含めての選択科目として設定されているか、もしくは第 2 外国語として独立していても、年間で 2 単位を設定している学校が多いように思われるが、本校では 1、2 年次では各 3 単位(1 年次生は全員が履修)、3 年次では最大 2~6 単位を履修することが可能(ドイツ語は最大 2 単位を履修することが可能)である。高等学校卒業までに、英語に加え、第 2 外国語についても高度な言語運用能力を身につけさせることを目指している。

本稿では、横浜国際高等学校における外国語およびドイツ語の教育活動、授業実践の内容を報告するとともに、日々の実践レベルで実感する高等学校における第 2 外国語の教育活動の意義についてもまとめてみたい。

2. 横浜国際高等学校の概況について

本校は、神奈川県立外語短期大学附属高等学校から引き続いて 2003 年度~2008 年度まで、文部科学省から「SELHi(スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール)」に指定され、高度な英語教育活動の実践例を蓄積した。また、旧外語短大附属高校より継続して、第 2 外国語科目を設置し、通常授業のみならず、姉妹校交流など多彩な活動を展開している。2014 年度入学生からは、その成果をさらに発展させる形で、文部科学省から 5 年間にわたり「SGH(スーパー・グローバル・ハイスクール)」の指定を受け、外国語教育と総合的な学習の時間を融合させる教育活動を実践している。

3. 第2外国語科目の設置・履修の状況、指導体制、指導内容について

第2外国語の科目としては、ドイツ語のほか、フランス語、スペイン語、中国語、ハンガール、アラビア語の6言語を設置している。アラビア語を開設しているのは全国の公立高校では本校のみである。

1年次生は全員入学前に6言語より1言語を選択し、「外国語Ⅰ」について週3単位を履修する。2年次以降は進路選択に向けた科目選択を行う都合上、引き続いて第2外国語を履修出来ない場合があるが、ほとんどの生徒が少なくとも2年次終了時までには「外国語Ⅱ」を週3単位履修する。希望に応じて2年次以降では1年次に履修した以外の「外国語Ⅰ」を履修することも可能である。また、主に3年次では、「外国語Ⅲ」に加え、「言語文化研究」科目を週2単位履修することも可能である(ドイツ語は現状同科目を設置していない)。

教員の指導体制としては、各言語につき、1人以上の日本人常勤教諭(一部は日本人およびネイティブ・スピーカーの非常勤教諭)が勤務しており、ALT(アシスタント・ランゲージ・ティーチャー)も履修者の規模に合わせて配置されている。外国語Ⅰ～外国語Ⅱについては、3単位のうち2単位は2単位連続で設置されており、ドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語では日本人教諭とネイティブ・スピーカーのティーム・ティーチング(TT)を行い、残りの1単位は日本人教諭単独で指導している。

指導内容については、各言語とも1種類以上の書籍教材を選定し、スピーキング、リスニング、ライティング、リーディングを総合的に指導している。高校生対象のスピーチコンテストなどにも積極的に参加し、毎年顕著な成果を挙げている。また、各言語で1校以上姉妹校交流の相手校があり、本年度はスペイン・フランスより姉妹校受け入れ(10月)と訪問(3月)が予定されている。

4. ドイツ語の教育活動について

ここからは、本校で第2外国語の一つとして開設されているドイツ語の内容に話を絞り、詳しく説明を行いたい。

4.1 ドイツ語の履修状況、指導体制と方法

入学者数によって人数に若干の変動があるものの、毎年1年次5～6クラス(200～240人)中20～40人の生徒がドイツ語Ⅰを履修しており、内8割の生徒が引き続きドイツ語

Ⅱを履修、さらにその内約5割の生徒がドイツ語Ⅲまでを履修する状況である。常勤の日本人教諭1名、非常勤教諭1名、ALT1名で、ドイツ語Ⅰ～ドイツ語Ⅲまでを指導している。現在ドイツ語Ⅰは2クラス、ドイツ語Ⅱは1クラスで指導している。ドイツ語Ⅰ、ドイツ語Ⅱは、先述したように、週1日2単位連続で日本人教諭とネイティブ・スピーカーの教諭・ALTによるTTの授業を行い、さらに別の曜日に1単位の日本人教諭による授業を行っており、合計週3単位で授業を行っている。ドイツ語Ⅲはネイティブ・スピーカーによる週1日、2単位連続の授業である。

4.2 入学前の生徒に対するアプローチ—体験授業の実施と文化祭への出展—

本校では入学前に履修する言語を生徒が選択することになっている。生徒の言語選択に役立ててもらうため、毎年夏～秋の中学生対象の体験授業実施に合わせて、各言語の体験授業も実施している。

ドイツ語の体験授業では、「ドイツ語であいさつと自己紹介ができるようになる」を目標に、日本人教諭とネイティブ・スピーカーの教諭がTTで、ドイツ語と日本語を使って授業を行う。ドイツ語を身近に感じてもらうため、ベートーベン、ブルクミュラーなど、中学生にとって比較的身近なドイツ語圏出身の作曲家やブンデスリーガで活躍する日本人サッカー選手などの話題にふれたり、「レントゲン」「リュックサック」等、普段の生活の中でよく使われるドイツ語についても紹介したりする場面もある。また、獨協大学外国語学部主催「全国高校生ドイツ語スピーチコンテスト」への参加状況と成果(去年は第1部、第3部で各1名が3位入賞および学校賞受賞、本年は第2部で1組が2位入賞)、派遣事業等への参加の実績(フランクフルト姉妹都市奨学金プログラムに過去3年間毎年1～2名が参加)、本校独自で企画実施しているバート・アイブリング・ギムナジウムとの姉妹校交流の内容等も紹介している。

また、毎年秋には、本校の文化祭において、ドイツ語選択者としての出展を行っている。生徒には、本出展が日頃の学習成果の発表の場であること、日本におけるドイツ語学習振興の一翼を担っていることを折に触れて説明しており、毎年2年次の生徒が中心となり、1年次～3年次の生徒の活動を取りまとめて出展している。これまで授業で作成したポスターの展示、劇、カーヴルスト調理販売、テーマ学習のまとめとして授業で作成した日本語字幕付きの動画を上映するなどの活動を行ってきている。また展示資料等に関しては、ドイツ連邦共和国の公的なドイツ語・ドイツ文化の普及機関であるゲーティンストゥット(東京ドイツ文化センター)からも協力を得ている。

4.3 ドイツ語Ⅰの授業

ドイツ語Ⅰでは、1年間をかけて、A1 レベル(CEFR、以下同じ)の内容を修了させることを目標に授業を行っている。毎回の授業では、日本人教諭もなるべくドイツ語で発話するように心がけ、ALTと日本人教諭とのTTと、日本人教諭の単独授業を合わせて週に3単位実施することにより、より学習効果の高い授業を模索している。前期から後期中盤までは主に教科書に則って授業を進めることで現在完了までの文法項目を理解させ、年度末に向けては学習事項の定着を目指し、ペアでドイツ語によるプレゼンテーションを作成・発表させている。

また、長期休業時には課題を課し、各自で学習内容の復習をさせるようにしている。例えば本年夏季休業時の課題では「教科書で学習した語彙や表現をなるべく多く用いて、自分や身の回りのことについてできるだけ多くの文を書いてくる」という課題を出した。A3 サイズの用紙両面にびっしりと、ほぼ習った語彙や表現のみを用いて多岐にわたる内容を記述し提出した生徒もおり、生徒の自己表現への意欲の高さを実感した。また同時に、適切に段階を追って語彙や表現を導入することにより、A1 レベル前半の指導でも自己表現活動を取り入れた授業活動を作ることができるということを学ぶこともできた。夏季休業明けからは、A2 レベルへの準備として、単元の区切りに合わせて「扱ったテーマを取り入れた場面設定をさせ、習った表現を用いたスキットを作らせて発表させる」というような活動も徐々に取り入れている。

教材については、本年よりDaF(外国語としてのドイツ語)の教材である「Ideen」(Hueber社)に変更した。本校の「国際社会でリーダーとして活躍できる人材を育てる」という教育目標をより強く意識し、ドイツ語、ドイツ語圏の文化を学習することを通じて、多様性を尊重する姿勢、自分や他者を理解し、積極的に他者とコミュニケーションを取る態度を養うこと等を目標として授業を展開している。

4.4 ドイツ語Ⅱの授業

ドイツ語Ⅱでは、A1 レベルの内容の定着を目指しつつ、より高次の表現を習得させ、A2 レベルの内容を修了させることを目標に授業を行っている。通常の授業では、ターゲットとなる文法項目を意識させた対話を作成させ、発表させるなど、A1 レベルよりさらに表現活動の機会を多く設定するようにしている。ドイツ語Ⅰと同様にALTと日本人教諭のTTと、日本人教諭による単独授業を合わせて週に3単位実施しているが、文法項目の説明等を一部日本語で行うほかは、なるべくドイツ語による活動時間を多く取る

よう心がけている。

本年行った授業の例を以下に 2 つ紹介したい。まず一つは、受動態の学習に合わせて、「ドイツの街や建物、城などを各自が 1 つずつ選び、写真やスライドと合わせて 3 分程度の紹介発表を行う」という活動である。生徒は発表原稿と合わせて自分の発表に関する 2 つか 3 つの質問と語彙リストを準備しておき、教員がそれをまとめてワークシートとして配布し、発表を聞いている生徒はワークシート上に質問に対する答えを書いておいて、最後に発表した。また、接続法Ⅱ式¹を学習する單元においては、「丁寧な依頼」の表現が発話される場面（飛行機の中、会社、病院等）と話者の職業（客室乗務員と乗客、上司と部下、医者と患者等）をクラスで複数考えさせたいうで、それぞれの場面で起こりうる状況についてペアでスキットを考えさせ発表させた。聞いている生徒たちにはその会話が起きている場面・登場人物・状況やスキットの内容を聞き取らせ、後ほど口頭発表させることで全体で内容を確認した。

このような活動は特定のドイツ語の研修を通じて学んだものではなく、同僚のドイツ語教員の実践から学んだり、筆者が受講してきた英語の研修からヒントを得て考えているものである。会話の活動を考える上では、すべての生徒が同時に活動できるということや、なるべくバラエティに富んだ素材を通じてドイツ語・ドイツ語圏の文化について触れることができるということなどを念頭に置いている。

4.5 ドイツ語Ⅲの授業

ドイツ語Ⅲは、ネイティブ・スピーカーの非常勤教諭が単独で2単位続連続の授業を行っている。既習事項を踏まえて、よりドイツ語らしい表現を身につけさせ、自由に自己表現させることを目指し、主にスピーキング、ライティング、リーディングを総合的に指導している。学習内容もドイツの最新事情や文化、政治の状況等多岐にわたり、生徒の興味関心、最新のドイツ語圏の情勢を踏まえて、タイムリーな話題を取り入れながら指導している。

4.6 授業以外の活動—スピーチコンテスト、派遣事業、姉妹校交流等への参加—

通常の授業活動以外にも、各種派遣事業への応募、獨協大学主催の高校生ドイツ語スピーチコンテストへの参加等も行っている。コンテストについては先に述べたとおり上

¹ およそ英語の仮定法過去に相当する。

位入賞者も出ており、ドイツ語選択者全体の動機づけにつながっている。

また、本校はドイツ・バイエルン州のバート・アイブリング・ギムナジウムとの姉妹校交流を行っており、隔年で、10～11月に同校からの訪問団を2週間程度受け入れ、同じ年度の3月に本校より20名程度の訪問団が同校を訪問するプログラムを実施している。2003年より続く手作りの交流である。同校生徒の日本滞在時には、本校の特色推進グループが中心となり、本校生徒宅へのホームステイ、ドイツ語選択者との一斉授業や一般授業への参加、近隣の小学校訪問と給食試食体験、茶道や書道等の日本文化体験等、毎回多彩なプログラムを準備している。また、本校生徒がドイツを訪問する際にも相手校よりさまざまなプログラムが準備されている。例を挙げると、ホスト生徒の授業への参加、音楽の体験授業、5年生生徒²に対するドイツ語による日本文化紹介、ダンスの授業、イースターに関連する工作の授業、学校で実施するコンサートへの参加(2016年訪問時の実績)等が挙げられる。同校との交流の後は、本校のみでさらに数日間ミュンヘンを起点とした活動を行う(2016年訪問時の実績ではノイシュヴァンシュタイン城等見学、ミュンヘン市内の見学とグループ別自主行動、レーゲンスブルク市内見学等を実施)。

5. 生徒の活動を中心とする教育活動づくりを目指して

以上に述べたような状況の中、本校で筆者がドイツ語を指導して4年目になる。1、2年目はドイツ語の教育活動の全体像を把握しつつ目の前の授業を作ることに追われ、現状を見直す余裕がなかった。常勤教員であるため、ドイツ語だけでなく英語の科目の指導、さらに校務分掌等もあり、当初はドイツ語の指導や教材研究の時間を確保することも非常に難しい状況にあった。

しかし同僚のドイツ語教諭と意見を交わしたり、コンテスト等の参加を通じて指導法を学んだり、姉妹校交流等を通じてドイツの教員と交流したりする中で、3年目頃より、もっと生徒の活動中心の授業を作っていきたいと感じるようになった。上述したように本年からは教科書も変更し、ドイツ語の活動を増やす取り組みを進めている。

また、幸運にも本年夏には、ゲーテインスティットアウトの実施するドイツ語教員研修(ドイツ・ブレーメンにて)に参加することができた。現地では、一般家庭へのホームステイやインタビュー活動を通じて最新のドイツ事情を学ぶとともに、世界各地の小学校～大学までのドイツ語教員とともに生徒の言語活動を中心に授業を作るための数々の手

² 日本の中学・高校に相当するギムナジウムには5年生から12年生までが在籍する。

法や指導例等をワークショップ形式で学ぶことができた。

その研修の中で、特に印象に残った内容を以下に2つ述べたい。まずは、ブレーメン市立図書館の訪問とドイツの子どもの読書事情に関する講義、また「読む」活動をコミュニケーションにする工夫として紹介された、語彙の導入活動やカードや写真、絵を使ってペアやグループで話しながら内容理解を進める活動である。これまで私が行ってきた「読む」ための活動は、個人・ペアで内容に関する質問に答えるものがメインであった。しかし上述の講義を受けることにより、そもそも「読む」ための素材をどのように選ぶべきか、その際に子どもの成長過程や言語の学習段階という観点からどのようなことが意識されるべきか、また何を目的として、どのような読ませ方をするのかというようなことについて想定したうえで活動を考える必要があることなどを学ぶことができた。またもう一つ印象に残った内容は、音楽や映像を取り入れた授業活動の紹介である。形容詞が歌詞にたくさん含まれる歌や、歌詞の内容が平易で、生徒が気に入るような軽快なメロディーの歌、A1・A2等のレベルからでも生徒が内容を理解することができる動画素材などを多数紹介してもらったとともに、自分でそのような素材を集めるための方法(インターネット上の素材の探し方など)についてもヒントをもらうことができた。それ以外にも、生徒をペアやグループに分けるための方法を多数学び、授業活動の中で早速活用している。今回学ぶことができた新たな視点をもとに、今後も生徒のやる気を引き出す授業づくりを目指していきたいと考えている。

6. おわりに

本校では第2外国語の授業において言語そのものだけでなく、文化や地域事情など様々な観点から総合的な指導を行っている。特に本校については、入学段階から第2外国語の授業に大きな期待を抱いて入学する生徒が多く、また実際に学習してみて、英語だけでなく複数の言語で自由に自己表現ができるようになりたいと考える生徒も多い。授業の充実が生徒の動機づけに直結することを実感する毎日である。他校でドイツ語を指導されている先生方からは、英語の授業時間確保に伴い、徐々に第2外国語を設置する学校が少なくなってきていること、「英語の指導を優先すべきではないか」というような意見があること等も聞いているが、高校生に対して英語の指導と並行しつつ週3単位の第2外国語の指導を行うことは、教育上きわめて意義のあることであると考えている。

そのように考える理由として、高校生が自己表現できるレベルの第2外国語を身につけ、その言語を母語とする話者と直接交流して、相手の文化を直接理解するチャン

スに恵まれることに大きな意義がある、ということを挙げるができる。世界には複雑に入り組んだ地域事情により解決の糸口すら見えないような国際問題が多数あり、現地の言語や社会状況を理解して、そのような問題と向き合い、解決を目指して行動することができる人材の育成が切実に求められていると感じる。第 2 外国語の学習は、学習者の興味・関心に応じてさまざまな活動形態が考えられるものでもあり、高校生の段階で多様な文化や価値観を尊重することを理解させるうえで、非常に有効なツールとなる。

高校生にとって、卒業後の進路について考えることは非常に大きなステップであり、高等学校の教育活動の中で、将来の展望や就いてみたい職業等を考えさせるうえで、第 2 外国語の学習を通じて日本語、英語以外の新たな視点を知り、多様な経験をすることが非常に大きな意味をもちうることもこの数年で実感している。これからも、ひとりでも多くの生徒に、世界にある多くのことばや文化に触れることの楽しさを味わってもらいたいと考えている。

(神奈川県立横浜国際高等学校)

German Teaching Practice Report at Kanagawa Prefectural Yokohama Senior High School of International Studies

Yuki IZUHA

Kanagawa Prefectural Yokohama Senior High School of International Studies (YIS) sets its educational goal on fostering students' communication skills and communication technology skills so that it empowers the students to be actively engaged in the global society. This Practice Report provides examples of foreign language teaching activities and especially those of German teaching activities at YIS, such as daily lessons, the open lesson day, preparation for the school festival and our school exchange program.